

身近なまちの風景物語(16)

みぎわ
柔らかな汀

頬をなでる風が気持ち良い。早朝の散歩は、清々しい空気が包んでくれる。朝風は心を穏やかにする。

砂浜に残る足跡は、波に打ち消され、気づくともなくなっている。歩いてきた軌跡がわからない。振り返るより、前を向くことを促されているようだ。

波が幾重にも打ち寄せ、複雑な波打ち際をつくる。常に動きがあり、二度と同じ姿が現れない。見る者を飽きさせない。

水平線という一本の線が静かに横たわっている。その長さは視界に入りきらない。視線を横に動かさないと全体像がつかめない。

その時の心持ちによって、視点は変わる。波打ち際を見る時もあれば、消波ブロックに跳ね上がる波を見る時もある。沖合を横切る船を見る時もあれば、水平線を見る時もある。やがて悩みや不安を打ち消してくれる。海は懐が深く、包容力がある。

犬の散歩をする人、海を眺める老人、部活で走る高校生、水際で遊ぶ子供たちと見守る親。思い思いに

過ごしている。砂浜は誰をも等しく受け入れてくれる。

天候によって、時間によって、季節によって、千変万化の海。日が暮れると切ない。照り返しは眩しい。海水浴客がいなくなると夏が終わる。台風の後には流木やゴミが砂浜に置き去りになる。

こうした波打ち際は、遠い昔からそこに存在する。わたしたちのまちより古い。その意味では先住者である。

まちは時代とともに変容する。でも海の姿はおそらく変わっていない。昔の人たちも今と同じように海と接していたのであろうか。

海は平穏な時ばかりではない。牙を向く時もある。自然の猛威を忘れてはならない。生活や家族を飲み込むこともある。跡形もなく社会をえぐる力も持っている。

でも対峙できない。畏敬の念を抱き、心身ともに仲良くしたい。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）